

平成27年4月10日号（第148回）

阿伎留通信

公立阿伎留医療センターは、医の心を重んじ、患者の生命と健康と生活の質を考える良質の医療を実践し、地域医療の最適化に努力します。

心地よい気候の春ですが、実は体調を崩しやすい季節と言われます。寒暖の差が激しいことや、新生活などの環境の変化でストレスが多くなるからです。疲れをためないようのんびりいきましょう。



今回の阿伎留通信は、

－「子宮がん、卵巣がんについて」－

をテーマに産婦人科 井上 千賀子医師よりお話しさせていただきます。

■子宮がん検診を進んで受けましょう

子宮がん検診は、子宮がんの早期発見と子宮がんになる以前の段階（異形成上皮）を見だし、未然にがんの進行を食い止めようとして行われています。現在の医学では、定期的に健診を受ける事とワクチン接種の実施で子宮がんの発症の大部分を予防する事が可能です。ただ日本のがん検診受診率は先進国の中で最低レベルにあり、また近年、初交年齢の低下による若年層の子宮頸がんの増加傾向が大きな問題となっています。

■子宮がんとは

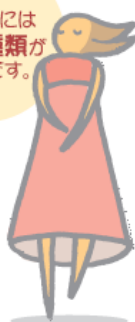
子宮がんには、子宮頸部に発生する頸がんと子宮体部に発生する体がんとがあります。それぞれ、原因、リスクファクター（危険因子）、性質はまったく異なっており、それぞれに診断法、治療法も異なります。

■このような自覚症状はありませんか？

子宮頸がん

- ・不正出血（特にセックス後の出血）
- ・黄色いおりもの
- ・1年間に約 7,000 人が診断され約 2,000 人が亡くなっています。
- ・HPV（ヒトパピローマウイルス）の持続性感染、感染は主に性行

子宮がんには
2つの種類が
あるのです。



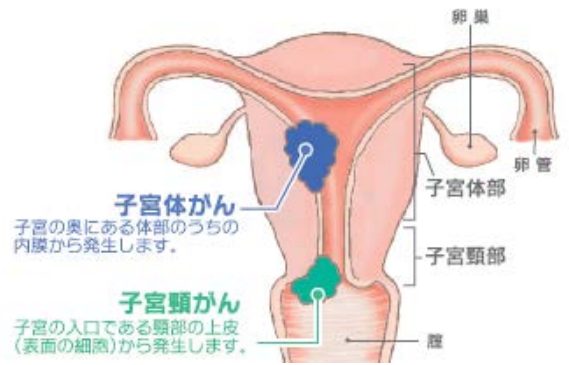
子宮体がん

- ・不正出血（閉経後の出血）
- ・下腹部痛、腰痛、排尿時の痛み
- ・1年間に約 5,000 人が診断され約 1,000 人が亡くなっています
- ・80%がエストロゲン（女性ホルモン）による長期間の刺激が関係

■初期は無症状

セックス経験のある方は1年に一度健診を受けましょう。一般の子宮がん検診は子宮頸がんの検診です。30～40歳代では10万人当たり30～40人の方に頸がんが見つかっています。40歳以上で肥満気味の方や若い方でも月経不順の方は子宮体がんの検診を受けるのが賢明です。

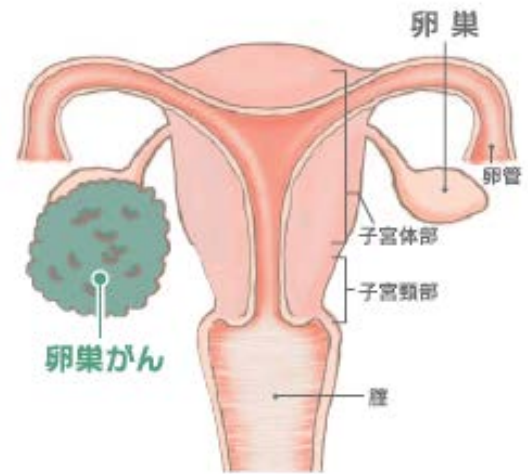
子宮体がんも以前は少なかったのですが、年々、年齢層を問わず増加しています。50～60歳代では10万人当たり15～20人の方に体がんが見つかっています。閉経された方、子宮内膜増殖症のある方、妊娠出産経験のない方、肥満、高血圧、糖尿病のある方は是非体がん健診もお勧めします。



■卵巣がんとは

卵巣は子宮の横に存在し、卵管を含めて子宮付属器と呼ばれています。卵巣は、おなかの中(腹腔内)にぶら下がるように存在するため、腫瘍がでさしくらい大きくなっても周囲への圧迫症状が出にくく、卵巣がんは早期発見が難しいとされています。このため診断時に進行している例が多く“サイレント・キラー”との別称もあるほどです。

現在日本では毎年新たに約7,500人の女性が卵巣がんと診断され治療を受けており、これはおよそ1万人に1人の確率です。年齢とともに卵巣がんの罹患率は上昇し、特に40歳を超えるとその発症頻度は急激に増加します。その傾向は欧米も同様で、卵巣がんの発症において加齢が重要な一因となっています。近年卵巣がんの罹患率は増加傾向にあり、現在日本では65歳以上の占める割合は15%を超えていますが、今後さらなる高齢化社会の到来により卵巣がんはますます増えていくものと推察されます。



■早期発見が大切な2つの理由

がんは、あらゆる病気の中で最も自覚症状が現れにくい疾患です。しかし、子宮がんは健診によって非常に速い段階から発見することができます。そして、早期に発見された場合、治療後に再発することはまずないと言われています。特に若い女性の発症が多い子宮頸がんは原因が明確で予防が可能、早期なら確実に治せるという、他のがんには無い大きな特徴を持っています。

子宮頸がんはHPVに感染した後、比較的ゆっくり進行します。健診により「がん」かどうか、だけでなく「がんになる前の状態」かどうか、も分かります。定期的にその経過を診ていくと、細胞が正常ではないけれど、まだがんになる前の段階(異常性上皮)から発見することができ、この段階で治療すれば、がん発生の予防がほぼ100%可能になります。

